

紫の上は六条院で終焉を迎えた

はじめに

「御法」巻をどう読むか、梅野先生の許で『源氏物語 注釈八』（梅野きみ子他・風間書院二〇一〇・一二、以下「注釈」と表記）を検討上梓した後、熊倉千之先生との議論の中で、「紫の上が二条院で死んでしまったとするのはおかしい、何処かに読み間違いがあるので？」との疑問が投げかけられた。古くて新しい問いである幻の巻の舞台は二条院か六条院かの問題に繋がる。先生には、漱石作品や中島敦作品、また、『古今和歌集』や『源氏物語』など、『注釈』の執筆とは全く無関係に常に文学についてお教えを忝うしていた。その先生からの問いに対して、私は紫の上臨終の場は、従来からの諸先学の説通り二条院とせざるを得ないであろう、としてきた。中宮の行啓に重篤の紫の上が、二条院の西の対から寝殿を通り東の対までのかなりの距離を移動して出迎えに伺う、中宮の身分を優先させた紫の上には無配慮で非人間的対応であることや、幻の巻における蟄居中の源氏が六条院と二条院間を移動するという矛盾はあるが、御法巻の「夏になりて」の前に、紫の上が六条院に帰った、との記述が無い限り、紫の上の最期の場所を六条院にするのは無理だ、と答え続けていた。『源氏物語』を読み始めて以来、出家もままならないまま、死期を悟った紫の上が、

紫の上は六条院で終焉を迎えた

嘉 藤 久美子

法華經千部供養と自らの最期の場合を「わが御殿と思す二条院」にしたのは、もっとも相応しい紫の上の選択と思ひ、幻巻の矛盾もそのまま受け入れて読んでいた。この古注以来議論のある問いに関しては、早くに提示された、「この巻の終わりまで源氏は紫の上の終焉の場所二条院を主居として、時々六条院に渡った」とする待井新一氏や、過去の諸論から見解を纏められた後藤祥子氏などの見解を凌駕するのは難しいと考えていた。

ところが、暫くして熊倉先生から、『源氏物語』深層の発掘―秘められた詩歌の論理―（笠間書院二〇一五・九、以下「深層の発掘」）で公にされる素案を示された。「紫の上の終焉場所は六条院」であると読み解けなかった千年の誤読の指摘である。検討考慮の末、大方首肯すべきと気付いた時は、頭を斧で打たれたような衝撃であった。私も沢山の矛盾を抱える従来からの説を鵜呑みにして読んでいたのではなかったか、という疑念が駆け巡った。それは『源氏物語』のいわゆる第三部、第四十二巻「匂兵部卿」以下「夢浮橋」までの十三巻は、第一部と第二部の作者紫式部が書いたものではないことを、テキスト内部から証明する」もので、「御法」と「幻」両巻のあいだに認められて久しい「矛盾点」を解明し、物語の主題を明確にして、桐壺巻から幻巻までが、五言律詩に基づいた構造であり、更には幻巻までの五百八十九首の歌が、「三十一文字」という和歌の論理を、物語のへ情

紫の上は六条院で終焉を迎えた

理」として構造化」している、という衝撃的な論である。

紫の上の終焉場所を六条院との読みに訂正する（頭を切り替える）ことによって、従来の読みや、私共が注釈した「御法・幻」それ以下の巻々の読みも多くの訂正を余儀なくされる。しかし、多くの矛盾点が解消される。『深層の発掘』は、『注釈』八巻を傍らに置きながら論考を纏められたと聞くが、我々は同九巻の注釈に取り掛かっていたこともあり、また、御著書で示されたご論考の多くを首肯しながら、物語の構造と結びついた抽象的論調も多く、私にはもう一言説明がなければ難解な点もあって、充分な検討を先送りしてきた。

本稿は、その論の確認作業の意味合いが強く、御法・幻の巻の私の物語理会を具体的に訂正し補うものとしてある。よって、一から四で示す根幹は既に『深層の発掘』で論じられたことが多く、その確認を含めた私の読みの提示である。それらの考えに基づけば、第三部句兵部卿巻以下はこのように解釈理会できるのでは、という新しい提案は紙面の都合もあり、別稿に譲る。ただ、これらについて『注釈』担当者間で、未だ協議は出来ていない。否、協議の土俵に議論を提案してはいない。ひとまず、嘉藤個人の解釈を提示して、大方のご批判を仰ぎたい。

一 紫の上は、六条院から二条院へ出掛けて法華經千部供養を催した

御法巻の冒頭場面は六条院である。「紫の上、いたうわづらひ給ひし御心地の後いと篤しくなり給ひて、そこはかとなくなやみわたり給ふこと、久しくなりぬ。」と、「紫の上」の呼称で書き出される。若菜上で女三の宮が登場して以来彼女に関わる人事を中心に、源氏の次世代を担う人々、柏木や夕霧に焦点を移して追い続けてきた前巻までとは異なり、源氏と紫の上の話に戻ったのである。紫の上の病状は、

「そこはかとなくなやみわたり給ふこと久しくなりぬ」「いとどあえかになりまさり給ふ」様で、「後の世のためにと、尊きことども多くさせたまひつゝ」出家を願ひ、暫くの余命を「行ひに紛れなく」送りたい、と願ひ続けていた。それを「かく頼もしげなきさまになやみあつてい給へば、いと心苦しき御ありさまを、今はと行き離れなんきざみに捨て難く、なかなか山水の住処濁りぬべく思しとどこほる程に：人々にはこよなう後れ給ひぬべかめり」と思う源氏は、許さなかった。そのような叙述の後に、紫の上主催の法華經千部供養が述べられる。

紫の上は、法華經千部供養を催すために、六条院から二条院に出掛けたが、法会の後、「昨日例ならず起きる給へりし名残にや、いと苦しうして臥し給へり。まづ我独り行く方知らずなりなむを思し続ける、いみじうあはれなり。

こと果てゝ、おのがじゝ帰り給ひなんとするも、遠き別れめきて惜しまる。花散里の御方に、

《花散里との贈答歌 省略》

やがてこのついでに、不断の読經、懺法など、たゆみなく尊きことどもせさせ給ふ。御修法は：寺々にてぞせさせ給ひける」（御法二）とあるのを、法会で体力を消耗した紫の上は最早六条院には帰れなかった、と、私はただそう読んできた。諸先学も、「御法の巻の初めに、病める紫の上が法華經供養に六条院から二条院へ移ることがみえる」と六条院で病を養っていたと読んできた。では何故紫の上の終焉場所を六条院ではなく二条院だと認定したのか。出掛けたのに帰らない筈はない、とは考えなかったのか。

少女巻で六条院に転居してからの紫の上と、二条院での紫の上の境遇を比較したとき、彼女が「わが御殿と思す二条院」は、源氏が須磨退去の折りに紫の上に移譲したままであったと思われる。そこは、紫の上の幼い頃からの幸せな日々を反映していて、文字通り里「わが殿」であったが、六条院に転居後の紫の上は、世の賛美羨望とは裏腹に、

「心にたへぬもの嘆かしさのみうち添ふや、さは、みづからの祈りなりける」(若菜下二二)と捉えていて、決して輝くような幸せの日々とは言えないものである。殊に源氏が女三の宮と結婚して以降は屈辱と忍耐、苦悩に満ちていたことを考えると、終焉の場は二条院が相応しいと誰もが読んだのであろう。

紫の上が、二条院を私邸のようにしていたことは、若菜上(二二／二二)にあり、また、発病後の治療や静養も、三月から十二月「十余日」の朱雀院の五十御賀の試案の前まで二条院で行っていた(若菜下四二／三八)。その経緯や、法会の翌日、「昨日例ならず起きる給へりし名残にや、いと苦しうして臥し給へり」とあること、また、後文に「やがてこのついでに、不断の読経、懺法など、たゆみなく尊きことどもせさせ給ふ。」とあることを、従来、紫の上はそのまま一人二条院に残って病を養い、「こと果てゝおのがじゝ帰り給ひなん」とある列からは当然のように除外されて読まれてきた。しかし、「こと果てゝおのがじゝ帰り給ひなんとするも、遠き別れめきて惜しまる」は、語り手が、参集した方々が銘々お帰りになられようとするのも、永別のようで名残が惜しまれると語ったもの。特に紫の上と歌を詠み交わした明石君や花散里とも、帰宅後は同じ六条院の中とはいえ、互いに二度と会うことはできまいと、その遠さが幽冥境を異にする永別に重なる紫の上の思いとして語り手に付度されて語られている。彼女の病状は法要後、「昨日例ならず起きる給へりし名残にや、いと苦しうして臥し給へり」とあり、この催し以前も臥せりがちであったと想定出来る。しかし、この法要の終了後、体調が更に悪化して、六条院に帰れなくなつて二条院に留まることは、特別の事情事態であり、作者の叙述の常から推せば、一言そのことが付け加えられて然るべきである。それがないのだから、紫の上は六条院に帰った、と読まねばなるまい。「やがてこのついでに、不断の読経、懺法など、たゆみなく尊きことどもせさせ給ふ。御修法は、異なるしるしも見えて程経ぬれば、例

紫の上は六条院で終焉を迎えた

のことになりて、うちはへさるべき所々、寺々にてぞせさせ給ひける。」は、花散里との贈答歌に続いて語られている。「やがて」は時間的にも状態的にも隔たりがなく、前に引き続くさまを云うのが原義。従つて、巻頭で「いたうわづらひ給ひし御心地の後いと篤しくなり給ひて、そこはかとなくなやみわたり給ふこと、久しくなりぬ」中で行われていた「不断の読経、懺法など」をさせ、「御修法」をこの法会の後もそのまま引き続いて行わせた意で、「やがて」は法華經千部供養を行つた二条院という場所を指すのではない。よつて、「夏になりて」と段落が変わる前、花散里との贈答歌の後、「やがて」の前に、紫の上は六条院へ帰った、として読まねばなるまい。そう解釈することで、次の明石中宮との対面場面の矛盾が解消する。また、幻の巻での従来から指摘されてきた矛盾点も解消する。この矛盾点に関しては前掲待井論文に整理されているので参照されたい。今日に到るまで大方の認識である。しかし、長い注解の歴史の中で紫の上は六条院に帰ったと読んだ例はなく、そのように解釈しているのは『深層の発掘』のみのものである。

二 明石中宮の紫の上見舞い行啓

紫の上の病状は季節の推移に合わせるように夏になって、度々「消え入る」ようになり、死は最早避けられない目前の状況であることが語られる。

この巻で初めて「中宮」と呼称される明石姫君は、紫の上が「おどろおどろしからぬ御心地なれど、たゞいと弱きさまになり給ひ」、「あたらしい悲しき御ありさまと見たてまつる」ことを聞き、養母のただならぬ病状を察知して、里下りした。

なお、中宮が親の病氣見舞いに行啓する例は、一条天皇時代に関白道隆の病氣見舞いに、中宮定子と春宮女御原子が南院に行啓したのが

紫の上は六条院で終焉を迎えた

初例、道隆は十日薨去。また、後一条天皇時代に道長^尊の許に中宮威子が行啓した記録がある。道長は翌月四日薨去。『小右記』には、東宮敦長親王(同二十六日)や後一条天皇(同二十九日)も法成寺の道長の許へ見舞いのために行啓行幸した記事がある。見舞う側見舞われる側の社会的権威と、病人の余命の僅かなことを印象付ける。紫の上の死を描くこの巻で、紫の上は六条院の女主人、中宮の養親として、社会的に認知、権威付けられていることを再認識させるために、中宮による格別の配慮が、紫の上の最期に相応しいものとされている。故に、ここでの舞台はやはり六条院でなければ意味をなさないのではないか。

「かくのみおはすれば、中宮この院にまかでさせ給ふ。東の対におはしますべければ、こなたにはた、待ちきこえ給ふ。」を諸解は、二条院でのことと解したために「ここにはた」の意味するところを誤読しているが、中宮は紫の上を慮って病を養う東の対の紫の上の許においでになる予定なので、紫の上は「ここにはた」こちらでやはりお待ちも申し上げる、ということで、重症の紫の上が移動しなければならぬような負担を掛けまいとする中宮の配慮の結果を、副詞「はた」で際立たせる場所の強調である。思いの外に「起きる給へるを、いとうれしと思したる」所以である。今生の別れとなろうかと危ぶまれるような病状と判断しての行啓であることを考慮すれば、病人が居室から出て、然るべき中宮の御座所まで出向いて迎えることを当然とするのは、親を見舞う娘側の孝養心が許さないであろう。

念のために加えるが、「久しき御対面のとだえをめぐらしく思して、御物語こまやかに聞こえ給ふ。院、入り給ひて、^置「今宵は、果離れたる心地して、無徳なりや。まかりて休み侍らん」とて渡り給ひぬ。起きる給へるを、いとうれしと思したるも、いとはかなき程の御慰めなり。」の「院、入り給ひて」から「とて渡り給ひぬ。」までは挿入句で、「起きる給へるを、いとうれしと思したる」主体は「御物語こまやかに聞こえ」交わす中宮である。諸解源氏と取るが、源氏の動作

を語り手は上文で「とて渡り給ひぬ。」と語り終えている。「起きる給へるを、いとうれしと思したる」が、源氏の言葉の前であれば源氏の思いとなるが、源氏は「巢」から離れて行ってしまったもう居ないのであり、起きている紫の上を「いとうれしと思し」ているのは「御物語こまやかに聞こえ給ふ」ている中宮である。正編の叙述では完了し終えた動作を遡って「思したる」のように現在形で叙述することはない。中宮は紫の上と「御物語こまやかに聞こえ」交わせることを無上の喜びとする。

従来、この場面は二条院でのことと考えられて来た。しかし、舞台は六条院である。繰り返しになるが、中宮は、もう動くのもままならない重症の紫の上を見舞うために、常^替の里下がり用いる寝殿の東面ではなく、直接紫の上の通常の居所である六条院東南の町の東の対へ、病氣見舞いに参ったのである。このように、紫の上の居所と中宮との会見場所を六条院東の対と特定したのは「深層の発掘」の指摘が初例であろう。

従来の解釈は、中宮の退出先を二条院とした為に、紫の上の病症を養う場所が、西の対や寝殿で揺れ、会見場所もそれによって寝殿や中宮の退出場所である東の対、と様々に解釈されて、その理由付けがなされてきた。旧来注釈書の諸説を纏めると以下のようなになる。

*紫の上の居所：①二条院西の対『弄花』『孟津』『岷江』『全集』『集成』『完訳』『新大系』『新全集』『鑑賞』 ②二条院寝殿『花鳥』『玉』『大系』『玉上評釈』 ③二条院東の対『全集』
*会見場所：①二条院東対『集成』『完訳』『新大系』『新全集』『新全集』『鑑賞(寝殿とする説もある)』 ②二条院寝殿『花鳥』『弄花』『孟津』『岷江』『玉』『新釈』『大系』『玉上評釈』 ③言及なし『全書』

近年の『新大系』『新全集』や『注釈』でも、紫の上は、二条院の

西の対（娘時分からの居所）から、法華經千部供養後も仏の御座所が設けられていた寢殿を通り過ぎ、明石中宮が里下がりする東の対へ身を運び、重症でありながらも中宮の身分に儀礼を尽くすという解釈を採っている。このような状況設定ではいかにも非人情味であるが、これを排除出来ない解釈の主因は、紫の上が発病後の治療や静養を四年前の三月から十二月の六条院での朱雀院五十御賀試案前までの十九月程を二条院で過ごしていたことと、紫の上が勾宮に伝えた「大人になり給ひなば、こゝに住み給ひて、この対の前なる紅梅と桜とは、花の折々に心とゞめてもてあそび給へ」と、勾兵部卿巻頭の「紫の上の御心寄せことにはぐみきこえ給ひしゆゑ、三の宮は二条院におはします。」とを直結させ、それを、紫の上の「我が御私の殿と思す二条院」（若菜上二ノ二）「わが御殿と思す二条院」に結びつけて、御法巻での紫の上の終焉場所を二条院である、とする解釈を産み出し、決定付け、動かし難いものとしてきたことによる。それは、幻巻では紫の上を亡くして失意のあまり六条院に籠居し続けて誰にも会わずにいる源氏が、六条院と二条院を往き来している以外には読み解けない状況「…構想に矛盾があるか。古今明解なし。」（『全書』）とされるような解釈を産み出した。その後、御法・幻巻の二条院か六条院かの問題は、大方が紫の上の終焉場所を二条院であるとする理會から、移動等の矛盾点を克服すべく、それを論証するための論拠を諸処に求めた数々の論を産み出してきたといえる。

続いての「方々におはしましては、あなたに渡らせ給はんもかたじけなし。」に関しては、従来この発言を、中宮の今時の里下がりについて、「東の対におはしますべければ」の所以を語る中宮の詞とする説と、紫の上の詞とする説とに解釈は分かれている。この「おはしましては」は、「あり」の尊敬語。言葉を発する側が相手方に対して敬意を持って用いたもので、発話者（ここでは中宮）を含むことはなく、紫の上の一人の居場所を指して言う中宮の言葉である。従って「方々」

紫の上は六条院で終焉を迎えた

は、紫の上にとってのあちらこちらであり、紫の上と中宮の居場所があちらこちらの意とはならない。只今面会している六条院東の対の紫の上の居所と、通常の行啓時には寢殿の東側で待ち受ける慣例になっている中宮の御座所を指すと考えられる。重篤の紫の上が私（中宮）に会うために、「あなたに渡らせ給はんもかたじけなし」と述べて、わざわざ紫の上の居る東の対に直行したのであるから、ここは私の常の里下り場所であるあちら（六条院寢殿の東側）までその御病身をお運び頂くのも勿体なく申し訳ない、意。よって、「御読経などによりてぞ、例のわが御方に渡り給ふ」の反射指示語「わが」は、紫の上ではなく中宮を指すので、「御方」は紫の上が何時も病を養っている居所ではなく、中宮が退出時に使う寢殿の東側のこと。紫の上が移動したのではなく、紫の上のための読経が始まったのを潮時に、紫の上の負担を考慮して、中宮は常の居所である寢殿の東にお渡りになった意となる。

三 紫の上逝去

中宮との面談に「（中宮が）しばしはあなたにおはすれば、明石の御方も渡り給ひて、心深げに静まりたる御物語ども聞こえ交はし給ふ」とつけ加えられているのは、明石が加わって、愛娘を縁に築き上げた恩讐を越えた深い宿縁の女同士の話らしい最後の場を設けた作者の配慮であろう。明石が「こなたに渡り給ひて」とあるのも二条院の東の対や寢殿が見場所ではない証左になろうか。

さて、次の問題箇所であるが、紫の上は、三の宮に「大人になり給ひなば、こゝに住み給ひて、この対の前なる紅梅と桜とは、花の折々に心とゞめてもてあそび給へ。さるべからむ折は、仏にも奉り給へ」と遺言する。紫の上は六条院に居るのであるから、「こゝに住み給ひて、この対の前なる紅梅と桜」の「こゝ」「この」は、当然六条院の

紫の上は六条院で終焉を迎えた

東南の町を指す。六条院の各町々の庭は、「御方々の御願ひの心ばへを造らせ」(少女三四/三三)たもので、春の町の庭は紫の上の「御願ひの心ばへを造らせ」、「南の東は山高く、春の花の木、数を尽くして植ゑ、池のさまおもしろくすぐれて、御前近き前栽、五葉、紅梅、桜、藤、山吹、岩躑躅などやうの、春のもてあそびをわざとは植ゑで、秋の前栽をむらむらほのかにまぜたり」(同)と造園されていて、「春の殿の御前、とり分きて、梅の香も御簾の内の匂ひに吹きまがひて、生ける仏の御国とおぼゆ」(初音二/二)とあった。その意匠を凝らした華麗さは胡蝶巻冒頭に詳述されている。また、野分の暴風に「(紫の上は)花どもを心苦しがりて、え見捨てて入り給はず」(野分二/二)、と語られるほど愛着を注ぎ造り上げた庭である。二条院にも、「梅は気色ばみ…階隱のものと紅梅」(末摘花二/一八)「二条院の御前の桜を御覧じて」(薄雲二/一四)と語られるように、紅梅も桜も当然あるが、紫の上の視点から語られたものではない。それに対して、四季に町を配した六条院では、中核となる春の町が紫の上の意向を強く反映して維持されてきたと具体的に語られていた。

紫の上の「まろが侍らざらむに、思し出でなんや」に、匂宮は「目を押し擦りて紛らはし」ながら「いと恋しかりなむ。まろは、内裏の上よりも宮よりも、はゝをこそまさりて思ひきこゆれば、おはせずは心地むつかしかりなむ」と、健気に応え紫の上の涙を誘う。「この対の前なる紅梅と桜とは、花の折々に心とどめてもてあそび給へ。…仏にも奉り給へ」の言葉には、「うちうなづきて御顔をまもりて、(紫の上の)涙の落つべかめれば、立ちておはしぬ。」と、目の前の祖母がいなくなるかも知れないというおぼろげな不安が、五歳の三の宮の感性をうち振るわせている。紫の上が亡くなった翌年、三の宮は、「はゝのたまひしかば」とて、対の御前の紅梅とりわきて後見歩き給ふ…花桜盛り過ぎて、樺桜は開け、…若宮、^{皇弟}「まろが桜は咲きにけり。いかで久しく散らさじ。木のめぐりに帳を立てゝ、かたひらを

上げずば、風もえ吹き寄らじ」と、かしこく思ひ得たりと思ひてのたまふ顔のいとうつくしき」(幻五/五)という利発さであった。源氏は、「覆ふばかりの袖求めけん人よりは、いとかしこく思し寄り給へりかし」など、この宮ばかりをぞもてあそびに見たてまつり給ふ。^{皇弟}「君に馴れきこえんことも残り少なしや。命といふもの、今しばしかゝづらふべくとも、対面はえあらじかし」とて、例の、涙ぐみ給へれば、^{皇弟}「はゝのたまひしことを、まがくしうのたまふ」とて、伏し目になりて、御衣の袖を引きまさぐりなどしつゝ、紛らはしおはす」(同)などの紫の上との別れの時より年長になった六歳の三の宮の利発な可憐さに、寂寥を慰めている。「世に知らず聴うかしこくおはすれば、あまりおそろしきまで御覧ず」とあった源氏の「読書始め」は七歳(桐壺一八/二)で、それと較べても遜色はなからう。

それはさておき、中宮の危惧した言葉通り「秋待ちつけて、紫の上は「あなたにもえ渡り給はねば、宮ぞ渡り給ひける」と語られるように、病状はさらに重篤になっている。係助詞「も」は「否定の形になる時には、全面的な否定となる」(『岩波古語』)ので、中宮が里下りして以来束の間の小康の折には紫の上が中宮の御座所に向くこともあったことを予測させる。紫の上の終焉を描く場面では、「おくと見る程ぞはかなきともすれば風に乱るゝ萩の上露」が、紫の上の源氏と明石中宮と交わした最後の歌としてある。『孟津』は「宮城野の本あらの小萩露を重み風を待つごとく君をこそ待て」(古今集一四恋四・694読人知らず)を挙げ「露はをく程もなく消物也。そとしたる世界なれば、我うへはそと吹風をまつ露のごとくと紫の心也」と注す。「萩」を「小萩」に連動させた「宮城野の本あらの小萩」は、遠く桐壺巻で桐壺帝が桐壺更衣の母と交わした小萩の贈答歌、「宮城野の露吹き結ぶ風の音に小萩がもとを思ひこそやれ」(桐壺二〇/八)と詠んで母を亡くした幼い源氏を喩えていた歌に呼応する。中宮の居るこの場での紫

の上も、小萩である宮達に心残しての謂いであるとの思いであろう。「風」と「萩」と「露」とを一首に詠み込んだ歌は、『古今集』には694番歌のみだが、「風」と「花」と「露」を詠み込んだ「露ならぬ心を花におきそめて風吹くごとく物思ひぞつく」(同巻十二恋二589貫之)がある。この貫之の歌は、「萩」と特定しない「花」だが、紫の上の人生を総括する最期の一首の本歌にはこの歌の方がより近い。熊倉氏が指摘されるように、589番歌を引歌と考える方が、より紫の上の心情に添う。そもそも彼女の出家の願ひは、若菜下(六ノ八)が最初であった。源氏の「御心ばへもつひに衰へなむ、さらぬ世を見はてぬ先に心と背きにしがな、とたゆみなく思ひわた」っていた(若菜下九ノ一〇)。源氏は、紫の上が葵祭の日の仮死状態から蘇生後「御髪下ろしてむと切に思したれば」(若菜下三ノ二九)「五戒ばかり受け」させたが、出家は許さなかった。御法巻になっても、彼女は「いかで、なほ、本意あるさまになりて、しばしもかゝづらはむ命の程は、行ひを紛れなくて」とたゆみなく思ひのたまへど、「決して許されず、そのような源氏を紫の上は、「年頃の御契りかけ離れ、思ひ嘆かせたまつらむことのみぞ、人知れぬ御心の内にも、ものあはれに思ひ」、出家の適わぬ身の上を「我が御身をも、罪軽かるまじきにやと、うしろめたく思されけり」と自省していた。その紫の上が死を目前に仏に仕える手段として法華經千部供養を行ったのであり、彼女の中に源氏への絶望「物思ひぞつく」は、最早無かったかも知れない。しかし、作者は貫之のこの歌こそ辞世に相応しい引歌として詠作したと言えまいか。

紫の上は傍目には源氏の寵愛する六条院の第一の夫人であり、女三の宮の「御勢ひ添ふ」(若菜下九ノ一〇)も、それを凌ぐ世の声望を得た。源氏から「あなたこなたなもの思ひとて、心乱り給ふばかりのことあらじ…親の窓の内ながら過ぐしたまへるやうなる心やすきことはなし。その方は、人にすぐれたりける宿世とは思ひ知るや」(若菜下二ノ三〇)と、また、女三の宮の件も「なま苦しかるべけれど、それにつけては、

紫の上は六条院で終焉を迎えた

いとど加ふる心ざしの程を」(同)注いできたと言われたが、源氏に連れ添う妻としての年月は、決して穏やかな日々ではなく、心細さ、不安や屈辱、嫉妬、忍従と忍耐…それらを知性で辛うじて乗り越え続けたもので、自己の存在を根底から揺さぶられるような不安な事態に度々遭遇させられてきた。それを受けて「のたまふやうに、ものはかなき身には過ぎにたるよそのおぼえはあらめど、心にたへぬもの嘆かしさのみうち添ふや、さはみづからの祈りなりける」(同)と彼女自身は答えて、「まめやかには、いと行く先少なき心地するを…先々も聞こゆること、いかで御許しあらば」(同)と出家を請うていたのは、この紫の上の最後の歌、彼女が源氏と共にあった自らの人生を顧みて、「風吹くごとく物思ひぞつく」生涯であったと捉えている暗喩である。唱和した源氏にはこの隠喩は届かなかったか、気付かない風であったのか分らない。そして、遂に紫の上は中宮と源氏に看取られて絶命する。

物語は、「まことに消えゆく露の心地して」、「明け果つる程に消え果て給ひぬ」と、紫の上の静かな絶命を「露」の様に捉えて告げる。

紫の上の絶命に平常心を失った源氏に代わり、死後の措置を執り行った夕霧は、そのまま源氏の側で「御忌に籠る」。その場面に「風、野分だちて吹く夕暮れに、昔のことと思し出で、ほのかに見たてまつりしものをと、恋しくおぼえ給ふ」とあるのは、十五年前の野分の早朝、六条院を暴風見舞いに訪れた夕霧が、「東の渡殿の小障子の上より…見入れ給へるに…見通しあらはなる廂の御座に、「け高く清らに、さ」とにほふ心地して、春の曙の霞の間より、おもしろき樺桜の咲き乱れたるを見る心地す。…愛敬はにほひ散りて、またなくめずらしき人の御様」(野分二ノ二)の紫の上を、偶然ただ一度「ほのかに見たてまつ」たのを思い出し重ねているのであった。紫の上の「限りのほど」を、女房達を制して「大殿油を近く掲げて…飽かずうつくしげにめでたうきよらに見ゆる御顔のあたらしさ」と見入った夕霧に蘇っているのは、

紫の上は六条院で終焉を迎えた

あの時の紫の上が、今居るこの部屋の廂の少し端近に坐っていた姿である。紫の上の最期の絶唱「おくと見る程ぞはかなきともすれば風に乱るゝ萩の上露」の「萩」は、夕霧がただ一度「ほのかに見」た紫の上が、「南の殿にも、前裁つくろはせ給ひける折にしもかく吹き出でて、もとあらの小萩はしたなく待ちえたる風の気色なり。折れ返り、露もとまるまじく吹き散らすを、少し端近くて見給ふ」(野分二二)ていた萩である。その「もとあらの小萩」は、十五年を経て、生い茂る萩になってはいても、吹き払う風に折れるのではと思われる程大きく揺れて、露も留めることはない。間近に「飽かずうつくしげにめでたうきよらに見ゆる御顔のあたらしさ」と我を忘れて見入る紫の上の姿である。この照応こそが作家の創造の要であろう。これを無視して、紫の上の最期の場所が、二条院では物語の芸術性は消えてしまいはしないか。また、紫の上の終焉場所は、源氏と二人で築き上げた六条院でなければ、この物語の女主人公の存在意味をなさない。これは紫の上が「我が御私の殿と思す」「わが御殿と思す」二条院を六条院より下位に置いて軽く見ることではない。物語の主題は何かを問い、全体を把握し、細部を丁寧に読み解くことで、辿り着いた結論である。

四 源氏の紫の上追悼の日々

幻巻は、あの世とこの世を往来する幻術士に託して「大空を通ふ幻夢にだに見え来ぬ魂の行く方尋ねよ」と独詠した亡き人紫の上の「夢にだに見え来ぬ魂」を求め続ける源氏の新年から歳暮までの一年間を語る。

源氏物語は幻巻を以て光源氏の一生の物語を語り終える。私は、以後の物語、所謂源氏物語第三部は、紫式部以外の作者の手になるものか、との疑いをもっている。過去幾度となく取り沙汰されては消えた見解ではあるが、いずれA-Iがこの問いを確かに実証する日が来るか

も知れない。その根拠の一つは先に触れた過去や完了の助動詞の使い方、の不統一であるが、この点は稿を改める。今一つは、詳述は別稿とするが、匂宮と薫の年齢差を、薫が匂宮に「いま二つ三つまさる」(浮舟一九/一六)とする叙述が、作者の錯誤ではない、と思われる点である。匂宮部卿巻以下夢浮橋までの十三帖の主人公は女三の宮と柏木の子、薫である。紫の上が愛育した御法・幻両巻で見られた利発な明石中宮腹の三の宮(匂宮)は、主人公薫を照らす脇役としての存在で、源氏のように光輝くことはない。この点に違和感を感じ、辿り着いた結論である。

幻の巻のオープンエンドは、三の宮をどう成長させることを読(聞)者に望んだのであろうか。光源氏の一生を語る物語は幻巻で源氏の出家を思わせて、その後の人生を語ることなく終わる。御法の巻は光源氏の物語のクライマックスで、源氏は万死に値する衝撃(最愛の紫の上の死)を受ける。そして幻巻は、自分の命に等しい最愛の人に取り残された事実で茫然自失し、世間との交わりも出来ず、取り返す術のない悔恨の傷心を抱えて、ただ「まぼろし」を追いつめるように紫の上追慕の一年余の月日を過す源氏の様子を、読み手の同情心を掻き立てるように四季の推移に併せて語る。漸く新年を迎えようとする師走晦日の頃、三の宮の「走り歩き給ふも、をかしき御ありさまを見ざらんことゝ、よろづに忍び難し。もの思ふと過ぐる月日も知らぬ間に年も我世も今日や尽きぬる」として源氏の一生は語り終えられている。それまで関わりを持った様々な女性達のこと、不安や懊悩、苦しみを与え続けて来たことの真摯な反省もなく、心ならずもそうせざるを得なかったと自分の心を騙し、自らの行動を正当化して取り繕い扱ってきた過往の罪を、——それは関わりあった女性達一人一人に対して同じ事だが——、紫の上を永遠の人として追慕する日々になって漸く思い到り、「(紫の上が)何ごともらうくじくおはせし御心ばへなりしかば：怨じはて給ふことはなかりしかど：少しにても心を乱り給

ひけむことの、いとほしう悔しうおぼえ給ふさま、(源氏は)胸よりも余る心地し給ふ」(幻二ノ二)涙で、全てが許されるような錯覚を読み手(聞き手)に与える源氏像を語り尽くして、巻全体を紫の上追悼一色に塗り込める。

紫の上を永遠に喪^{うな}つて初めて、自分の命ともいえる喪った者の掛け替えのなさに自失し、その追慕の日々に、せめて夢でも紫の上に会いたい、切なる願いを「まぼろし(幻術士)」に求めても、「夢にだに見えぬ魂」であった。一切の現世の栄華は幻のようであったことを知り、残りの人生のあるべき姿と往生のあり方を模索し、藻掻く主人公の変身である。桐壺巻の桐壺更衣を愛惜する帝の心情に呼応させた、その形こそが虚構の文芸作品の完成であろう。光源氏の物語はここで完結している。

紫の上の逝去後初めて廻ってきた新年は、「春の光を見給ふにつけても、いとゞくれまどひたるやうにのみ、御心一つは悲しさの改まるべくもあらぬ」と語り出される。「源氏は紫の上を失った悲しみに簾中に籠もったまま、拝賀に訪れる人に会おうともしない。わずかに弟の螢兵部卿宮とだけ対面し、春を愛した紫の上を偲ぶ。」(『注釈』八・幻一)。「春の光」と言う表現によって始まるこの幻巻の舞台は何処なのか、三の宮の「まろが桜は咲きにけり」の場所に関して、『弄花^{はな}』(『細流』以来今日まで六条院か二条院かで議論になって来た。従来は、御法巻末は、源氏が二条院で紫の上を送り、追悼しており、御法の巻は二条院一色に塗り込められている、と読まれてきた。しかし、そのことは「おのがじゝ帰りに給ひなん」の「おのがじゝ」に紫の上を含まず、紫の上が法会の後六条院には帰らず二条院に残った、と読んだためであることは述べた。

従って、幻巻での出来事は全て六条院での事である、と理會すれば、物語内の今日まで矛盾とされていたことは全て氷解し、それだけで事

紫の上は六条院で終焉を迎えた

は足りる。

幻巻は、源氏を描く最後の巻であり、巻頭の舞台は紫の上への三ヶ月の服喪期間が過ぎて猶、傷心の癒えぬ源氏が、御簾の内に籠もったままで新春を迎えているのに、源氏の悲しみを他所に、年賀に訪れる人々の様子から語り出されている。冒頭の「春の光」は、「いつも春の光を籠めたる大殿」(胡蝶三ノ二)に降り注ぐ光であり、胡蝶の巻では紫の上を「春の上」(同四ノ二)と呼称するための導入となり、源氏の主催する六条院の「春の光」を込めた「大殿」の華麗な美を象徴することは(同三ノ二)であった。従って、此の巻は紫の上亡き後の「くれまど」う六条院での源氏を描くものである。此の場所が二条院であったのは、女主人公とも呼べる紫の上が、六条院の第一夫人であり、源氏最愛の妻であった意味をなさないのでないか。そのことは、源氏が「御心地なやましきさまにもてなし給ひて、御簾の内にのみおはします」所へ螢宮が新年の挨拶に参上する場面からも読み取れる。源氏が螢宮に「我が宿は花もてはやす人もなし何にか春の尋ね来つらん」と詠み掛け、宮は「香をとめて来つるかひなく大方の花の便りと言ひやなすべき」と応じ、涙ぐみながら、「紅梅の下に歩み出で」、「花はほのかに開けさしつゝ、をかしき程の匂ひなり」と愛でる。この紅梅は、従来から指摘されているように、梅枝巻に照応し、「二月の十日、御前近き紅梅盛りに、色も香も、似るものなき程に、兵部卿宮渡り給へり。：花をめでつつおはする程に：」(梅枝二ノ二)と叙述された紅梅に照応する。源氏が催した薫物の試み後の酒宴に螢宮が、源氏、柏木、夕霧、弁少将と共に愛でて唱和した「花(紅梅)」で、さらに六条院を辞去する際の源氏との贈答歌にも詠み込まれていた「花」である(梅枝四ノ三)。物語中には、この例以外に螢宮が紅梅を賞翫した箇所はない。これも、幻巻の当該箇所は、あの時賞翫した六条院の紅梅であることを示し、物語の一貫性に繋げている。御法巻で「紅梅と桜」が、春を好んだ紫の上をとりわけ象徴する景物として、印象付けられ、

紫の上は六条院で終焉を迎えた

語られていたのであるが、「これよりほかに見はやすべき人なくや」という源氏の言葉は、「君ならで誰にか見せむ梅花色をもかをもしる人ぞしる」（古今集卷一春上・紀友則）を下敷きに、紫の上がこよなく愛した紅梅の見事な春の庭を、あなた（螢宮）以外に共に愛でるに値する人は誰もいない、との悲しみの吐露である。あの薫物の試みの折り、螢宮は紫の上の調査した「梅花はなやかに今めかしう、少しはやき心しらひを添へて、めづらしき香り加は」っている薫香を、「この頃の風にたぐへんには、さらにこれにまさる匂ひあらじ」とめで給ふ（梅枝三ノ二）ていた。勿論調査された薫香と実際の梅花は異なるが、源氏が、あなた以外にこの紅梅の美を共感して愛でてくれる人はいない、という心情は、この折と重なる。「御遊びなどもなく、例にvariatarこと多かり」という、新春の、例年とは異なる六条院の様子であった。

蛇足になるが、紫の上の喪が明けた後も、「女房なども、年頃経にけるは、墨染めの色こまやかにて着つゝ、悲しさも改め難く、思ひ覺ますべき世なく恋ひきこゆるに、絶えて御方々にも渡り給はず、紛れなく見たてまつるを慰めにて、馴れ仕うまつる」を、大方の解釈では、「以下は紫の上付き女房の描写なので、二条院の様子である。」（『注釈』幻一）としている。しかし、女房たちも源氏も六条院に居なければ、彼女等の視覚の範囲内に源氏の行動である「御方々にも渡り給はず」は見えないわけで、二条院なら、「疎き人には、さらに見え給はず。上達部なども、睦ましき、また御はらからの宮たちなど、常に参り給へれど、対面し給ふこと、をさくなし」、「大将の君などにだに、御簾隔てゝぞ対面し給ひける」と、籠居をし続ける源氏が、仮に人目を忍んで偶々外出することがあったとしても、二条院内の女房達に用向きが、御方々訪問か否かは分かる術はないであろう。それなのに、源氏が、「御方々にまれにもうちほのめき給ふにつけては、まづいと堰き難き涙の雨のみ降りまされば、いとわりなくて、いづ方にもおぼつ

かなきさまにて過ぐし給ふ」とある。「御方々」花散里、明石の君など六条院の女君たちに、「うちほのめく」ほんのたまさかに顔を見せること。人にも会わず籠もりきっているこの時期の源氏が、二条院から六条院の御方々の許へ人に見顯されずに訪問することは難しいし、それをすれば、年賀の人々にも会わず「御心地なやましきさまにもてなしたまひて、御簾の内におはします」叙述とはならないのではないか。この状況の源氏が、六条院に居なければ、わざわざ「絶えて御方々にも渡り給はず」とする女房の視点は無理であり、不必要と言える。

後の宮は、内裏に参らせ給ひて、三の宮をぞ、さうぐしき御慰めにはおはしまさせ給ひける。「はゝのたまひしかば」とて、対の御前の紅梅とりわきて後見歩き給ふを、いとあはれと見たてまつり給ふ。二月になれば、花の木どもの盛りなるも、まだしきも、梢をかしう霞みわたれるに、かの御形見の紅梅に驚のはなやかに鳴き出でたれば、立ち出で、御覧す。植ゑて見し花の主もなき宿に知らず顔にて来るる驚とうそぶき歩かせ給ふ。

春深くなりゆくまゝに、御前のありさまいにしへに変らぬを、山吹などの心地よげに咲き乱れたるも、うちつけに露けくのみ見なされ給ふ。外の花は一重散りて、八重咲く花桜盛り過ぎて、樺桜は開け、藤は後れて色づきなどこそはすめるを、その遅く疾き花の心をよく分きて、色々をつくし植ゑおき給ひしかば、時を忘れず匂ひ満ちたるに、若宮、^皇「まろが桜は咲きにけり。いかで久しく散らさじ。木のめぐりに帳を立てゝ、かたひらを上げずは、風もえ吹き寄らじ」と、かしこう思ひ得たりと思ひてのたまふ顔のいとうつくしきにも、うち笑まれ給ひぬ。^皇「覆ふばかりの袖求めけん人よりは、いとかしこう思し寄り給へりかし」など、この宮ばかりをぞもてあそびに見たてまつり給ふ。

右は、問題の幻巻での幼い三の宮の発言箇所である。（傍線は前掲の梅枝（二ノ二・四ノ三）との重出語。）従来の解釈では、「対の御前」を「御法巻での遺言をふまえると、二条院の紅梅であり、現在の物語の舞台は二条院と言うことになる」（『注釈』幻四）として来た。幻巻の冒頭部を六条院と解釈した諸先学も、御法巻での紫の上逝去の場を二条院としたために、誰にも面会しない籠居中の源氏が、ここでは六条院から二条院へ渡って来ている情景として読んだのである。六条院の春の町は、新造の初めから、紫の上を女主として造営されていて、前掲「南の東は山高く、春の花の木、数を尽くして植ゑ、池のさまおもしろくすぐれて、御前近き前栽、五葉、紅梅、桜、藤、山吹、岩躑躅などやうの、春のもてあそびをわざとは植ゑて、秋の前栽をむらむらほのかにまぜたり」（少女三四ノ三三）「弥生の二十日余りの頃はひ、春の御前のありさま、常よりことにはふ花の色、鳥の声、他の里にはまだふりぬにやと、めづらしう見え聞こゆ」（胡蝶一ノ二）「御前の方ははるばると見やられて、色を増したる柳枝を垂れたる、花もえもいはぬにほひを散らしたり。他には盛り過ぎたる桜も今盛りにほほ笑み、廊をめぐれる藤の花の色もこまやかに開けゆきにけり」（胡蝶一ノ二）と「春の上」に如何にも相応しい庭に設えられて、紫の上の人物造形と一体化された庭であった。それは、「植ゑて見し花の主もなき宿」、

「…その遅く疾き花の心をよく分きて、色々をつくし植ゑおき給ひし」と今、源氏や三の宮が見ている当該場面の庭と照応する。一方、二条院の「狭き垣根の内なりとも、その折の心見知るばかり、春の花の木をも植ゑわたり、秋の草をも掘移して、いたづらなる野辺の虫をも棲ませて、人に御覽せさせむと」（薄雲二ノ二〇）は、源氏が意匠を凝らした邸内の様を秋好中宮に語った点が質を異にする。紫の上が、幼い頃据えられた二条院「我が御殿」も当然彼女の意匠が反映されていたであろうが、紫の上が意匠を凝らしたことは語られてはいない。源氏が紫の上を追悼する場合は、新造の初めから紫の上と共に作り上げた六

紫の上は六条院で終焉を迎えた

条院でなくては、物語内の照応性は勿論、物語が何をテーマに描かれ語られて来たかの真実に迫ることは出来ないであろう。紫の上は最後まで六条院の女主人として居た。

「花の木どもの盛りになるも、まだしきも、梢をかしう霞みわたれるに、かの御形見の紅梅に鶯のはなやかに鳴き出でたれば」「その遅く疾き花の心をよく分きて、色々をつくし植ゑ置き給ひしかば、時を忘れず匂ひ満ちたるに」は、紫の上が、春の庭をいつも、うつくしく花咲き匂うように心遣いしていた、前掲の少女（三四ノ三三）胡蝶（二ノ二）の六条院の春の庭である。「花の木ども」は、花盛りや、まだ蕾のものがある中で、紫の上の形見の紅梅には、鶯がやってきて華やかに鳴いている、源氏は「植ゑて見し花のあるじもなき宿に知らず顔に出来る鶯」と紫の上のいない虚しさを抱え「うそぶき歩かせ給ふ」ているのである。以下の場面では、源氏は三の宮を伴って女三の宮を、また、明石の君を訪ねるのだが、諸注釈もこの場面以降は六条院内のこととし、季節の巡りに関わる人々との応接を、紫の上哀悼に重ね、年の瀬を迎え、紫の上の文殻を焼く。「御仏名の日」蟄居を続けている源氏は、紫の上の死後初めて人前に出る、とある。「その日ぞ出でる給へる」は、長い籠もりから、人々の前に、やっと姿をお見せになられる意を強調したものの。それ以前に二条院と六条院を行き来する姿を想定することは難しい。

以上のように物語は、六条院で終焉を迎えた紫の上を、追慕して誰にも会えず籠もる源氏の悲嘆の様を四季の巡りに併せて追い続け、歳末いよいよ出家する時期が到来したと、漸く源氏の出家、終焉を予測させて語り終わる。「今年は今日に果てぬとか聞く」（『後撰集』巻六冬・敦忠）感慨を詠んだ「もの思ふと過ぐる月日も知らぬ間に年も我が世も今日や尽きぬる」は、源氏最後の独詠歌であるが、「儼やらふ」三の宮の無邪気な声は、次世代の晴れやかで輝かしい未来を予兆させる。前歌で導師が「千代の春見るべき花と祈り」おいた、源氏の後世

紫の上は六条院で終焉を迎えた

代の幸福な輝きを三の宮で象徴させるようにして物語は完結し閉じられる。

*『源氏物語』の引用本文は『注釈』による。御法・幻巻からの引用には段数を記載しない。他は(巻名・段/新全集の段)の順で示す。また、諸注釈書の略記は『注釈』と同様にした。

注1 待井新一「源氏物語幻の巻の解釈——二条院か六条院か——(国語と国文学(一九六二年二月)、源氏物語の鑑賞と基礎知識 御法・幻に転載)。

注2 「哀傷の四季」(秋山虔・木村正中・清水好子編『講座源氏物語の世界 第七集』昭和五七年)

注3 幻の巻の舞台をめぐって——喪家・二条院——(源氏物語の鑑賞と基礎知識 御法・幻)

注4 「関白正二位藤原朝臣依病入道、年四十三、中宮並春宮女御、行啓彼里第。」(『日本紀略』長徳元(995)年四月六日)

注5 「中宮(威子)行啓法成寺、依入道前太政大臣(道長)所_レ悩也」(『日本紀略』万寿四(1027)年十一月八日)

注6 桐壺の御方は…姫宮(女三の宮)のおはします大殿の東面に、御方はしつらひたり(若菜上二〇/二〇)

注7 共著者柳井滋氏「御法・幻巻主題」(『源氏物語研究集成 第2巻』風間書房平成一年九月)に詳論がある。

注8 「花鳥」「玉」「大系」「玉上評釈」

注9 「一葉」「細流」「弄花」「万水」「孟津」「岷江入楚」「首書源氏物語」「湖月」「源氏物語新釈」「全書」「全集」「集成」「完訳」「新大系」「新全集」

注10 『紫式部集』のちから相撲 メイキング・オブ・『源氏物語』(熊倉十之・2016・10モチいふ社)

注11 三宮事幼稚の心二条六条無分別歟二条院に似たり如何

注12 此語にて二条院の事にみる義ありされと此六条院の花をもまいらせ給かと也又は六条院二条院の分別なくしての給幼稚の心なるへき歟注13 紫の上を中心にした女の生き難さを世に訴え問うこと。『深層の発掘』第三章参照。

* 本稿は二〇一七年二月名古屋平安文学研究会において口頭発表したものを元に加筆訂正したものです。席上ご助言ご教示を賜った会員の諸先生方に深謝申し上げます。